「男２人で何が家族だ」

青空なつと　（30 代）

マンションの５階が僕たちの家だ。
遠目に富士山が見えて夏には近く花火も見えるという。2LDK の部屋。
広さにも設備にも不満が無い。ここで一緒に暮らす。
僕は彼とここで家族になるのだ。

とは言え結婚はできない。子供もできない。
「それで何が家族だ」と思うのが正直なところ。３０歳の僕が居るこの場所は、育ってきた家族像とは程遠い。

僕の家族は両親と兄弟が男４人いた。兄弟仲がよかったわけじゃない。ほとんど話さないし、それぞれの反抗期の時はそれはひどいものだった。だけど家族ではあった。
みんなで寝る部屋で一緒に寝たり、遊園地に遊びに行ったり、幼いころの思い出はある。大人になってからも口数は増えないけれど、酒を交わせば少しだけ話すことがある。
僕の思う家族像はそんな感じのモノだ。親と子供がいる普通の家族。

だから心のどこかで静かに思う。男２人で何が家族だ、と。

僕の彼はよく話す。僕の兄弟４人を足して両親２人をかけた以上によく話す。だから２人でも賑やかだ。僕は静かだけど、彼のうるささに引っ張られることがある。

☆

荷解きが落ち着いて役所に２人で向かった時のこと。
住所変更のために行ったのに、意識をしていなくて不意を突かれた。
住所を変更すると、僕たちは同じ住所になったのだ。それをするために来たのに急に嬉しくなった。そうか、僕たちは同じ住所に住む。
何をもって家族になるのかそんなことは知らないけれど、これからなっていけばいいんだと、住所を見つめて嬉しくなった。

☆

「お兄さんたちどうですか、お話だけでも」

横浜赤レンガ倉庫のイベントに出かけた時だ。携帯ショップのキャッチに捕まってしまった。携帯料金の見積もりだけでも、熱心に話してくるホットドックの着ぐるみを着たおじさんの押しに負けた。

僕たちはテントの中に連れていかれて、よくあるアンケートに答えた。そしておじさんから、若いスーツを着た男へと変わる。

「今ならキャッシュバックがあるんですよ」

同じやり取りをこれまでに何度もしてきたはず。なれた小芝居を僕たちの前でする。

「あれ、今機種変すればすぐキャッシュバックできるんでしたっけ」そう言ってわざとらしく、上司らしい人間に問いかける。

「ええ、まあいいよ。特別にな」上司はわざとらしくそう言う。

断るのも面倒で僕たちは契約をすることにした。元々変えようとも思っていた。手続きを進めて住所を入力したりしていると、そのお兄さんは言った。

「あ、家族割使えますけど。どうします？」

彼の顔を見て、それから返事をした。

「お願いします」